

大会印象記

中道 仁美

今年度の大会（第三五回）は、庄内平野の城下町、山形県鶴岡市郊外で開催された。五年前、出羽三山に登るために立ち寄って以来であったが、駅前の変貌ぶりには驚いた。聞けば、駅前のビルは、ともに今年開業したばかりであり、駅に近接した方のビルは、まだひと月も経たないとのことであった。独自の歴史的発展を旅人に感じさせた、その素朴な街並みをもつ地方都市が、皆同様の特色のな

い街づくりに至るのが現代の傾向である。景観的には、もはやその歴史性を払拭してしまうかにも見える一方で、城や天守閣の再建、博物館建設といった歴史発掘が行なわれる。この両者の一見相反した方向性は地方都市の現代における混沌の現れと言えよう。このような混沌は何も地方都市だけのものではない。筆者は今大会に先立ち、新潟大学で開催された関西農業経済学会に出席したのであるが、東北、北陸などの米作地域では、長びく不況により兼業の機会を失った農家が、米価低下により農業にも戻れない状況の下で、まさに深い混沌の中にあることが論題の一つであった。それは、それぞれの学会、研究会でも話題となった「地価」問題も含めて、現在の日本社会の混沌を象徴しているようである。

このような状況の下で開催された今大会における共通課題報告は、まさにその混沌に迫るものであった。高山隆三氏は「村落とは何か」という問いかけから始めて、次第に土地問題に接近し、「あるべき土地利用論理、合理的土地利用（秩序）論理」がいかなるものであるかについて考え、そこに価値判断の問題の潜むことを指摘する。そして現実の土地利用実態について、「土地法」「村落社会秩序」を問題点として取り挙げ、村落における支配、権力構造の変貌との関わりを論じる。このような本質に迫る問いかけに対して活発な議論が展開された。「土地法」の考え方や、支配、権力構造の変化と関係する、村落と兼業の関係が議論の中心であったが、短時間では議論が尽くせず残念であった。

次いで、開催地庄内の農業、土地、村落について、秋葉節夫、小林一穂両氏から長期間にわたる多大な研究の一端が披露された。まず、詳しい現状分析に先立って、調査地庄内の村の変遷、今日の村

の状況、及び土地に関する概況が報告された。他地域に比べ最も早く農地価格が低下しており、これが農地の担保能力を低下させ、農協の経営を圧迫しているが、農家は三・五ヘクタールの経営規模でも水稲作だけでは家計費を賄えないのである。二集落の事例では、土地、機会、労働力利用形態などの経営形態を詳しく分析して、稲作継続、兼業進行の下での受委託の拡大とプラスアルファ志向について述べ、将来の可能性として十ヘクタール経営が示されていた。筆者が今夏行なった郡市（名古屋）近郊水稲単作地帯の調査で、五ヘクタール規模ですら希望者が一人もなかったことを考え併せると、不況と米価低落の下で米作にかける東北農民の切実な思いが感じられる。

共通課題の最後の報告は、これもまた長期にわたる成果の一端が布施鉄治、小内透、小内純子の三氏により披露された。北海道の稲作北限地帯の三つの集落について、常に政策的に変貌させられてきた経営形態であったこと、政策転換により農民生活は常に大きな影響を受け、安定的な生活を営み得なかつたことが前提として説明された後、近年の減反政策の展開と農村、農民生活の変動について、各集落の担当者別に分析に入つた。三集落の農業経営形態は、その土地条件に大きく規定されている。水田単一経営が依然大きな比重を占める集落では、減反率も他に比べて低く、その結果、減反政策はむしろ稲作経営と他の作目経営との所得格差を広げた。しかし、稲作経営では負債が拡大し、奨励金に依存するという脆弱な経営基盤にあり、畑作経営、肉畜経営では十分な所得が生みだせない。それゆえ、これ以上の減反は農業経営を破綻させ、農民層分解を進行させるだけである。減反率が八割を越える畑作、酪農、稲作経営の

併存する集落でも減反とともに農民層分解が進むが、離農層、下層で農業所得がマイナスになるなど農業経営が悪化し、その結果離農による農地流動化が進んで、上層に農地が集められる。酪農と畑作に分かれている集落では、経営形態による農民層分解が顕著であり、これらの経営形態による階層格差が集落構造を規定している。他の地域とはかなり異なつた経営条件をもち、それゆえ異なつた農業政策下にある北海道の農村ではあるが、そこに現れたものは、他の地域の農村、農業の今後を示唆しているのかもしれない。

さて、自由報告は五つあり、最初の報告は、これまた開催地庄内の近世地主制下における小作関係用語「俵田（畑）作、俵田渡口米」の検討を通して、近世庄内の地主、小作制が、本間勝喜氏により考察された。主な論点は、上述の俵田渡口米が小作料を示すものなのか、土地生産力を示すものなのかであり、従来の小作料を示すという仮説を検証する過程で、新説に対する反証が、豊富な資料を用いて展開された。当時の生産力を知るための基礎資料となるものだけに、興味深い報告であつた。

次いで、佐藤康行氏により、村落研究の中では比較的研究の少ない漁村を対象に、漁村生活を特色づける生活組織と信仰の関与について報告された。親類ネットワークの特徴として、いわゆる本家、分家ではなく、婚姻関係を主体に重親類が構成されていること、形成されている三つの組の構造について、部落の下部団体ではあるが、異なるところの多いことが明らかにされた。これら部落の血縁、地縁組織を結ぶものが信仰であり、その信仰も様々なものが見られるが、これらの理解が村落生活の理解につながるという。信仰を通して村を見るといふのは、すでに農村や都市に対する方法論として多

大な蓄積があり、漁村でのアプローチに期待したい。

三番目は、イギリス留学の成果の一部、イギリス農村社会研究について不破和彦氏から披露された。現在のイギリス農村社会研究の史的展開が、その政治変容と深く関わっていたことは、イギリスにおける社会学の史的展開と併せて、興味深い。筆者は、ヨーロッパの家計史を研究するためにイギリスの十八、九世紀の生活調査資料について検討中であるが、これらの調査に対しては、統計的な意義を別にして、資料としての評価はあまり行なわれていないようである。本報告でもこれら古い研究成果に触れられなかったのは、これらを研究するものとしては残念であった。いづれにしろ、戦後の農村社会研究活動が、本報告の目的であり、アメリカに比べて断片的にしか紹介されにくいイギリス農村社会研究の系統的研究は、注目に値する。冒頭に紹介されたR・E・S・S・G（農村経済・社会研究会とでも訳せようか）が、当村落社会研究会と名称だけでなく、構成員の多様性においても著しく類似していることをみて、当村研の先駆的なことに驚き、その必要性を再認識した。

第四番目の報告は、横山敏氏による、地域計画の推進と農民の学習運動の関係を明らかにしようとするものであった。近年、地域計画の推進に対して、集落の意思決定問題が大きな課題となっている。本報告では、指導的農民と農協による農業構造改革が推進される過程で行なわれた、集落農民の学習運動を紹介し、農民の学習過程で明らかになった要求により、農協の地域計画が策定されるという事例を紹介する。一般的に行なわれやすい上からの計画策定に対して、これは下からの計画策定であり、現在の集落の意思決定問題に対して全く別の視点を提示しようとするものであった。

自由報告の最後は、池上甲一氏による、農用地利用問題において看過されがちな、畑作集落の砂丘畑集団利用に関するものであった。水田とは異なり、砂丘畑への農用地利用改善事業の導入は、転作後の水田利用畑作の可能性を示唆するものである。事例では輪作農法が紹介されているが、このような輪作農法が機能するためには土地所有が最も大きな障害であり、借地の推進、及び圃場の集積がポイントとなる。報告者は、それに対して、経済的棲み分け、社会的共住の考え方を展開している。筆者は以前、同じ丹後機業地帯における農地流動化について、機業の展開が農地流動化にいかに関わったかを述べたことがあるが、兼業の可能な稲作に比べて畑作との兼業はむしろ困難であり、その意味では流動化が進みやすく、現に事例地の流動化率は高いのであるが、報告者のねらいはその先、流動化以後の農地集積化問題の方にあるように思われる。

さて、今回の大会は自由報告の多く、多年にわたる研究成果が披露されるなど、大へん実りの多いものであり、短時間では十分な報告が聞けず、議論も尽くせず、大へん残念であった。京都在住の筆者としては遠い陸奥ではあったが、現在ではもう村研にしか見い出せなくなってしまう、修学旅行の夜のような一夜の集いにひかれて参加した。枕投げならぬ議論の応酬も近年は減少してきたとのことであるが、日頃めつたに聞くことのできない話題など、まだまだ興味深く、楽しみな一夜である。最後になったが、幹事となられた皆様の行き届いたご配慮に改めて感謝の念を表したい。予期せぬ地区報告とこのような印象記のご依頼、「うっそー」とは言えず、忘れられない大会となった。